

江戸時代漁業に関する若干の史料

—阿波国板野郡里浦を主として—

津川正幸

一

こゝに紹介しようとする史料は、さきに近世庶民史料調査委員会の探訪によりその所在が明らかにされたところのものであつて、同委員会編、日本学術振興会刊行にかゝる、近世庶民史料所在目録第三輯(二一三頁)に所収されたところのものである。すなわち、

四国二二九

所蔵者 徳島県板野郡北灘村粟田

藤倉虎太郎保管(庄屋)

旧地名 阿波国板野郡粟田村(徳島藩)

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

数量 三一通

年代 正徳三年—明治四年 主として江戸後期

内容 里浦と長原・別宮等の漁区係争文書を主とする漁業関係の史料

利用 板野郡誌に一部転載

と登録されたところのものである。またこの史料のやや詳細にわたつては、徳島県立図書館の郷土資料収集事業の手はじめとして、飯田、岸本、福井三氏の共編、徳島県庶民史料所在目録 第一輯(七二—七三頁)に再録されており、その所在については大方の承知されているところであろうと思われる。

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

七四

しかしながらこれが利用の点については、何等適当な処置も取られていない状態である。阿波藩の漁業制度あるいは漁業経済状態をしるについては、すでに若干の史料が、旧藩時代の漁業制度調査資料あるいは阿波藩民政資料あるいはまた、同県市、町、村、郡誌等におさめられてはいるけれども、他地方についての漁業関係史料に比較すれば微々たるものであるといつて過言ではなからう。

さて筆者はさきに、旧藩時代地方漁業生産の基盤⁽¹⁾についての考察にあたり、こゝに掲げる史料に該当する地方を研究対象としたのであるが、それ以来何等かのかたちで、僅かに三一通の不完全なものではあるけれども、漁業史研究者の利用に供しうればと希望していたのであるが、ようやくその機会をえ、こゝにその全貌を提示する次第である。

二

徳島藩の漁政については、同藩が阿波、淡路両国をそ

の所領とするところであつて、地理的条件は一国は三面に海をひかえ、一国は四方に海をめぐらすところで、蜂須賀氏入国以来いわゆる阿波水軍の水主の確保の必要から、漁夫の確認、漁業の奨励にはつとに意のはらわれたであらうことが推察される。すなわち、

定⁽²⁾

当国於北浦他国より網引申由承及候。今日以来堅政道仕引せ申間敷候。何角申者於有之は此方へ召連可罷越候。為其如此候。

慶長十一年八月十六日

益田彦四郎

北泊浦百姓中

政所孫左衛門

とあるように、家老益田内膳より知行地、三千五百六十九石余の内の一支配地である北泊浦に対し、讚岐境に位置する処より、領分の確立を意図して他国網の漁業稼を禁止している点にもその一端がうかがわれる。

さて以降の漁政推移については他稿にゆずり、史料に

そくして若干の問題を考察しよう。

一、渡海飛船加子役に関するもの

この項におさめた五通の内、(1)は阿波淡路の方角、里程を聴いたものであり、(2)は飛船加子役負担に関するものであるが、それが漁業権あるいは漁業運上と関係をもつていたことを示す史料である。すなわち徳島藩の一方での漁業制度として、「水主役を勤めた浦を真浦と言ひ、勤めぬ浦を端浦と称し、真浦が漁権を有した。」⁽³⁾との事例と照合さるべきものである。(3)は阿波渡海の水主役の一例、(4)、(5)は同役負担に対する幕末明治期の褒賞、申渡の一例である。

以上の史料よりして、漁業権の主張と加子役負担の間に密接な関係が存在することが認められ、更にこの事は漁場の用益についても具体的にあらわれてくるところであるが、次の項においてしられるところである。

二、漁業免許、漁貢請浦制に関するもの

この項に関しては一一通の史料がある。こゝに請浦制と規定したのは、地租徴収方法に見取、定免取の二法

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

が存するが、後者の豊凶の如何にかゝらず一定の租率でもつて、年貢を徴収する方法に類するもので、漁業運上の徴収方法についても、年口取なる年間の漁獲水揚高に依じて一定の(五分一あるいは十分一)率でもつて徴収する場合と、こゝにいうところの請浦制による徴収方法、すなわち、一カ年何百匁、向う何カ年合せ何貫何百匁といった具合に、大漁不漁の如何にかゝらず一定の率で運上をおさめる契約により、一定の漁場の用益が許可されるもので、史料(11)、(12)、(13)に見られる通り、契約その裏付けとしての質物の書入れ、運上銀上納の様式が知れる。

さて史料は明和期(一七六四年)以降に属すが、(8)、(9)、(10)、(14)の諸史料によつて次のようなことが察知される。それは漁民の側においては、一応打続く不漁あるいは天災による漁業生産手段の損傷、消失および地方^{デカク}における田畠の不作を理由に、先契約時の請所運上銀高よりも低額の銀高での漁場用益の更新延長の願出、それは勿論表面的な理由であつて、裏面的な理由は、というよりも常

に封建的支配下で受身の位置におかれていた漁民のあからさまに表現しえないところの、むしろ本筋といつてもよい領主側の態度である。というのは幕府をはじめ諸侯においてもみられる近世中期の一般的傾向である財政窮乏およびそれに起因する藩政改革の動行である。阿波藩においてもその例に洩れないところであつて、端的には

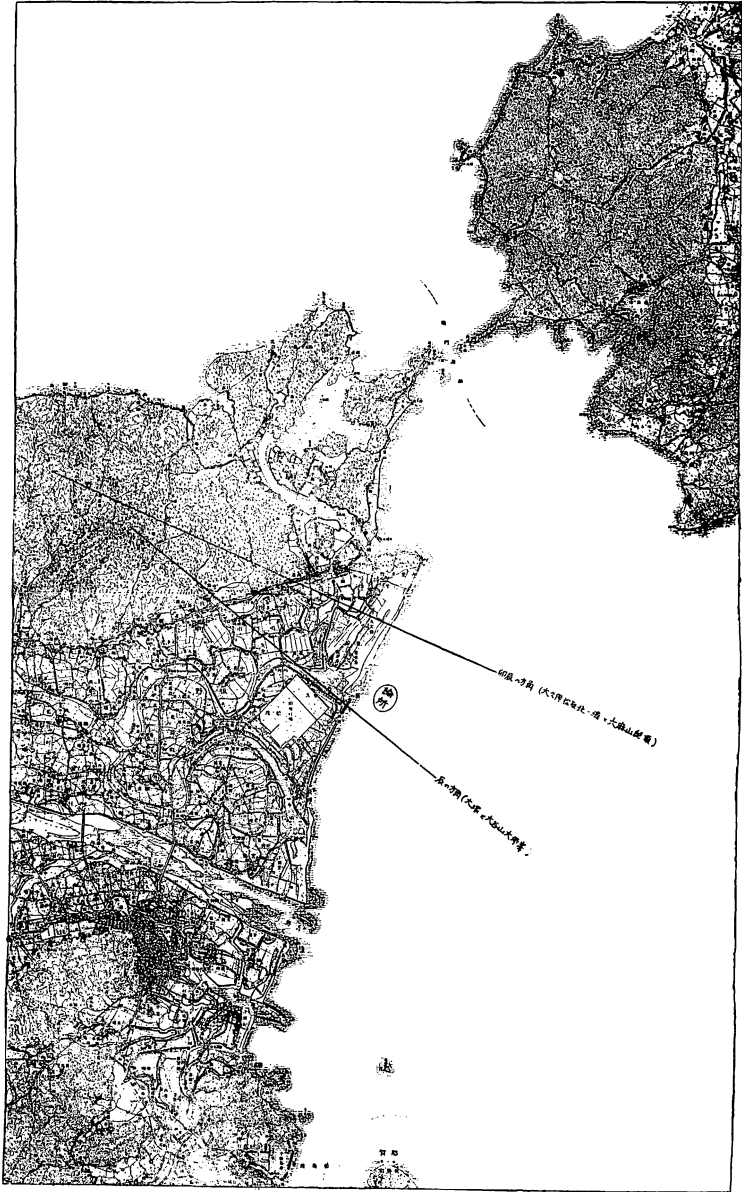
藍作に対する諸政策の推移に見られるところで、宝曆期(一七五〇年)には領主または給人に対立する藍騒動が発生している。しかもなお明和より安永期(一七六四〜一七八〇年)にいたる間の徳島藩の財政窮乏は甚しく、ために明和七年(一七七〇年)には家臣の俸禄について、三年を限つて五割、安永四年(一七七四年)には四年を限つて六割の借上げが実施され藩庫の消極的な増収をはかり、他方地租の増収のみにたよらず、たとえば林政の改革による林業生産、流通面での商業資本の排除による直接的な農民経済の把握と支配に切換えての藩庫収入の増大化等の政策が施行されているような実情で、かかる政策が如何に細部にまでおよんだか、可能な限りは最大限

に徴収しようとした意図の一端が、漁業生産の請浦制、年貢取への切替えにおいて見られるところである。すなわち漁場請年限の短縮と請銀高の引上げ、若しこれに応じない場合は旧慣は反古にして、入札によつて請銀高の糶上げをはかるうとする強硬な態度にそのことが表現されているところである。

三、漁場入会および論所に関するもの

以上、二項の史料によつてうかがわれた領主の漁業運上増収の態度は、間接的に入会漁場の係争の続発という事態にあらわれてきている。この項におさめる一五通の史料によつてうかがわれるところであるが、隣接の漁村間に発生した争論に対して、決定的な裁許をなすではなく、出来得るならば内済でというのが当時の定法であつたにしても、同一論所で短期間に同じケースの争論が続出する原因の一つとして、支配者の態度をあげてもあながち誤りではなからう。勿論漁獵技術の向上、漁業生産の伸展、あるいは自然的条件の変化に左右されること多いことを無視するわけではないが、そのみで解釈す

第1図 阿波国里浦・長原浦漁海論所（史料(26)参照）



第 1 表

村 名	田 畑	貢 租	戸 口	備 考
林 崎 浦	町 6.39	石 84	戸 185	陸田のみ
岡 崎 浦	5.72	65	197	陸田のみ
里 浦	152.2	1,364	302	上 中 下 $\frac{82}{100}$ $\frac{27}{100}$ $\frac{15}{100}$
別 宮 浦	59.21	177	172	陸田 $\frac{9}{10}$ 水田 $\frac{1}{10}$
津 田 浦	30.41	161	61	陸田 $\frac{15}{100}$ 水田 $\frac{85}{100}$

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

るには不十分であるとい
憾をまぬがれない。

こゝにあげた争論文書は
里浦と別宮浦のうち長原と
の間に発生した入会漁場用
益についてのものである
が、そのほとんどの史料が
里浦側よりのもので一方的
なものであり、双方の史料
を検討した上でなければ直
ちにその是非をつけがた
い。ただこのような争論を
惹起するにいたつた漁業生
産の基盤の差違によつて、
一方がより積極的であり、
他方が比較的に消極的であ
つたといふことはできる。
すなわち、隣接する数力村

の田畑面積、貢租高、戸口について、その概数（正確と
はいえない）を阿波誌巻之三の記事よりひらうと、第一表
のような状態であるが、里浦村については半農半漁とい
うよりもむしろ主農従漁的な地方村であり、他方別宮浦
は主漁従農的性格を有し農業以外の稼によつてたつてい
るような浦方村であることがしれる。右のような原因が
あいまつて、安永、寛政、文化、文政と約五十年間に
わたって、内川筋の蛤漕ぎに、外海の鯛曳網から鯛網漁業
にいたるまで、前後数回、落着をみたかにみえて再燃す
るという繰返しの争論が継続したものである。以
上において三一通の史料についての概略を述べたが、そ
の夫々について次に紹介することにしよう。なお貴重な
史料を永い間快く貸与して下さつた藤倉虎太郎氏に対し
て深謝の意を表したい。

註(1)(6) 拙稿 社会経済史学二二の一

(2) 徳島県刊 蜂須賀蓬庵

(3) 農林省編「旧藩時代の漁業制度調査資料」

(4) 堀江英一編藩政改革の研究—阿波藩における藩政改

革（大槻）

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

七八

(5) 拙稿「封建制下の木頭林業」林野庁刊 調査報告

一、渡海飛船加子役に關するもの

(裏端書) 享保二酉年ニ当ル

(1) 西十月廿九日撫養北浜にてヒ仰付書付扣

仕上ル 覺

漁師共申ならはしむハ、津田川口ノ沖洲浦分三拾町
程別宮浦分五拾七町程里浦分大磯迄四拾五町程、右
之通三ヶ浦之町数ヲ以相考ル所、津田川口ノ大磯迄
里数三里余程と奉存罷在ル。右之通今日段々御詮義
之上申上ル処相違無御座ル。以上。

享保貳酉ニ当ル

西十月廿九日

一 此度淡路御国門崎ノ御国御城下船着迄方角并町里付
ヒ仰付ルニ付、私共ヒ召寄今日里浦大磯出崎にて御
詮義ト遊ビ。右門崎ノ津田川口迄之海上大磯之出崎
相障リ見通ニ難成様ニ相見ヘ申ル。依之門崎ノ大磯
迄之方角里数御立、大磯ノ津田川口迄之里数方角ニ
段御立被遊ビ。大磯ノ津田川口之儀方角何レニ相当
ル哉ト御船頭吉見安左エ門殿并私共浦人立合磁石御
ふらせ被遊ビ方角左ニ申上ル。
一 大磯ノ津田川口ヘ方角午ノ方ニ当リ相見ヘ申ル。
一 大磯ノ右門崎ヘ子之方ニ当リ相見ヘ申ル。大磯ノ門
崎迄海上里数決定仕たる義無御座ルヘ共二里程御座
ルト浦人申ならはしル。
一 津田川口ノ大磯迄里数是又決定仕たる義無御座浦人

津田浦庄屋 貞 之 亟
同浦五人組 久 左 兵 衛
沖州浦庄屋 俵 右 工 門
同浦五人組 平 左 工 門
別宮浦庄屋 當 左 工 門
同浦五人組 次 左 工 門
同 庄 兵 衛
里浦庄屋 六 右 工 門
同浦五人組 庄 右 工 門
同 左 平 太
同 仁 右 工 門

同	惣右工門
土佐泊浦庄屋	弥兵衛
同浦五人組	庄右工門
同	才右工門
同	与次右工門
同	彦右工門
林崎浦与頭庄屋	三郎右工門
高島藤八様	
右之通相与上ル已三月	
齋藤七之丞殿	
関川庄右工門殿	

(2) 乍恐御窮奉申上覚

當御屋舗様急御用之節御取渡飛船之儀先年土佐泊浦
浦北泊右三ヶ浦相勤居申処、六拾ヶ年已前右御用
當浦老ヶ浦へ被仰付いニ付其節迷惑之旨奉願上い得
共、御意重而被為仰付い。然ル処其節當浦諸魚御口銀
五歩一之御積合ヲ以所請ニ被為仰付い処、右飛船當浦
老ヶ浦ニ相勤申ニ付右御口銀拾歩老御積合ヲ以所請ニ

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

被為仰付いニ付、御口銀餘分ヲ以右船新ニ相作備置其
後六七ヶ年廻り作替御用相勤居申い処、拾老ヶ年以前
右魚口御年行ニ被為極、餘分銀も無御座い。且右御用
之儀は毎々過急ニ被仰付御儀ニ御座い得ハ、浦中廻り
い而ハ相勤不申いニ付、船乗馴い者相雇右御用迄ニ相
備置い儀ニ御座い。且又右船作替銀并ニ加子迄内銀
之儀ハ其比右漁夫共一統人別ニ指出し来り申儀ニ御座
い。随而只今之飛船作替之節漁夫共右彼是申出いニ
付、私共請負他借仕九ヶ年以前作替御用相勤させ居申
い処、其後右他借返弁得不仕いニ付、去ル寅年紙面ヲ
以御増役被為仰付い哉又ハ三ヶ浦融通被為仰付被下い
哉之旨當御役所様江奉願上い処、其後明神村組頭庄屋
綱木庄右工門殿被仰聞いハ、六拾ヶ年余も相勤来りい
処今更右様奉願上段甚々奉恐入御儀故指扣い様被仰渡
いニ付、先相扣居申い処右船大破ニ相及申ニ付作替之
儀ニ当、亦浦中一統江申付い処浦中ニ相及申出いハ、
近年不作不漁ニ付今以作替之儀一向方便無御座い間御
上御慈悲之程再應奉願上真い様申出い而、私共迷惑仕

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

八〇

右船破損仕御用方御指支ニ相成い而ハ私共一統恐入至極迷惑奉仕儀ニ御座い間、恐多奉存い得共只今右御用船ニ壹日壱人役宛右船役として被為仰付被下いハ、尚又私共手元ニ而他借仕、右船新ニ作御用指支無御座い様相勤させ可申いニ付、右之段乍恐横切ヲ以御窺奉申い。以上。

文化六年巳四月日

里浦庄屋	善右衛門
同浦五人組	林右衛門
〃	夫平
〃	庄治郎
〃	喜八郎
〃	作兵衛
曾我部 繁	八様
庄野 義三太様	
鈴木 寛之丞様	
板丹 夫 蔵様	
有田 形 郎様	

(3) 福良浦御渡海水主之義ニ付浦中百姓へ申渡覚

一當亥正月以來諸侍様式番立

御目見へ相済同月廿三日御渡海之処御乗船并ニ御荷物船之内、彼是出戻り御船有之、旁右ニ附同廿九日庄屋益右エ門岡崎御屋敷へ被召呼御使番十人御衆中御揃之上、其浦水主共近比心得方不宜御船頭渡海面々之申聞方甚以龜略成振舞之者中ニハ多有之、尤心得方宜敷者も有之、彼是如何之事ニい。已來之趣其浦役人中申談い而睨と教示有之度旨被仰聞、其他益右エ門承知仕い。被仰聞覚

一水主共切紙ヲ以呼懸い節は、時刻少も延引不仕早速罷出い事。

一水主共荷物之義は、諸侍御荷物ハ先へ積入兎角出帆害成不申様可仕事。

一出帆船中ニおいては沖合之事ニいハ、猶以氣ヲ附出情いたし、不寄何事ニ御船頭之申付方早速相慥い事。

右之外被仰聞方数多有之い得共、悉クハ申達難聞先繰

之処申渡猶以兎角ハ出情いたし、諸侍様方御荷物杯も追々岡崎へ到着ニ得ハ心ヲ付出情第一之事と存い。

一此度御渡海ニ付当浦水主へ被下置役数左ニ相記ス。

一御せき馬船兩艘 水主式拾壹人

八拾七人役

内三人役ハ夷三人ニ増役

一御小早船 水主七人 拾四人役

一加船七艘分 水主式拾壹人 百五人役

内式拾壹人役ハ御褒美として増役被下置

一加船壹艘 阿万も立掃り 水主三人

三人役

一出戻り加船六艘 水主拾八人 九人役

右夫々へ被下置い

但し見届として内田源助殿福良へ御出御戻之節文七

弥右エ門伝兵衛相送りいニ付格別之御沙汰ヲ以壹人

役宛ノ三人役被遣尤別文ニ記ス

但し御船兩艘ハ福良へ着船壹艘は海上相渡しいニ付

右浦も漕船として罷出い筈、右着船兩艘之内も水主

式人かりニ罷出い。此水主へハ御褒美之御言葉有之
追而役人中讃談之事。

一御船水主ハ時々ねばや用意仕持参仕事。

右之通此度役人中も申渡い間已來ハ随分相心得い事。

文化十二年亥正月廿九日

(4) 御當職御書附写

覚

板野郡里浦加子人共之儀、平素心得方宜御年貢先年ハ御定之日限相延い儀無之、并ニ加子役銀上納向を始地役懸物等ニ至迄速ニ相運、且右浦方之儀從來五人組五手ニ相別取立い内、至極困窮之者共は親敷役人共申談取替上納仕置若和布蛤等為取ニ而、追々請取い様仕遣いハ一授至極令帰服、自然稼向出精豊凶ニ不拘御年貢大切ニ相心得、速ニ上納致い次第浦人共心得宜庄屋五人組共ニおゐても前願之通相勤い儀偏ニ奉重上をい段、彼是奇特之心得尤之事ニい。依之為御褒美左書之通夫々下置い条此段可被申付い。

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

十二月廿八日

一金百疋 庄屋耆人江

一鳥目耆貫文宛 五人組四人江

一同百貫文

但家数三百拾軒ニ付三百式拾文余宛

右之通嘉永四亥年御當職御下知之懸申渡有之処、此節
令写指遣者也。

（包紙）

(5) 明治元辰年十一月四日

飛船被仰付御書

御郡代様より被仰渡い

板野郡里浦庄屋

正木利喜右衛門

五人 与 共

従先年岡崎渡海御用之節指出来い飛船之義、其浦ニ引
受造立指出、右加子并地合渡海之加子とも夫々出役相
勤い処、近来之時会柄ニて加子出役ハ繁、殊ニ諸物未

八二

曾有之高直ニ相成い場合ニ付、加子人共厚生難渋い委
細歎願之趣、彼是取調評議之上、元ノ之面々被申出有
之処、難渋之次第無餘義運ニい得は、飛船之義ハ従上
出来い御付ニ付、其余之義ハ勤懸之通被御付之旨御仕
置御下知之趣、元ノ之面々達有之ニ付、此度申渡い
条右様可相心得い。

二、漁業免許、漁貢、請浦制に関するもの

（裏端書）

(6) 正徳三年巳閏五月中喜来丞右衛門請川境記録居く御請証

文写

中喜来川通請所上ハ太郎八洲鼻切、下ハ広戸口左右、
北ハ友打川三つ相迄、南ハ埋ミ木塩行迄、撫養明洲鼻
切、但川筋ヲ離入江又ハ溜り等之分ハ差除獵不仕場所
其外網釣勝手次第任管、私請継被仰付い。御運上質物
之義ハ別紙書物差上い。川境彼是右御究之通毛頭相背
不申獵仕可申い。仍而請証文如件。

中喜来浦 丞 右 衛 門
正徳三巳年閏五月四日

□ □ 通左衛門殿

右之通□□致証文い条御書類可と成い以上。

巳閏五月四日

西尾信蔵

柳本権兵衛殿

長谷川新右衛門殿

右請所川境之義、此方記録ニ不相見いニ付、請所人手前相糺い処、前々より右境之通請所仕来旨申ニ付如何可ヒ仰付哉と賀嶋主水殿、山田織部殿へ正徳三年閏五月三日相同い所、件之通可相究旨被仰聞ニ付証文相調い。

(前文欠)

(7)

所今年ニ至り中木来川請所人三郎兵衛方へ相渡し可申旨申出いニ付、迷惑之趣紙面ヲ以此度御郡様へ御訴訟申上い。依之右川筋獵場境等絵図ヒ仰付、各御越ヒ成、里粟津中木来右浦々御呼出仕糺之成、広戸内川中木来浦請所相入り居申旨中喜来浦々申出、粟津浦漁師共漁口之儀内川漁之儀ハ中木来請所人江口指出、外海漁口之義ハ里浦請所人江指出来い旨粟津浦々申出い

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

ニ付、私申立不分明之義ニ思召右之趣ヲ以従来通可仕哉之旨御入割段々被仰聞、然上ハ右浦々より申上い通私得心仕い。御慈悲之上右紙面御指下ケ被下いハ、難有可奉存い。右之段宜被仰上可被下い。以上。

里浦請所人 元左エ門

巳極月四日

當左エ門様

三ら左エ門様

右之左エ門申上い段私共一座にて承知仕い。以上。

巳極月四日

里浦庄屋五人組

粟津浦庄屋五人組

中木来浦肝煎五人組

請所人 三郎兵衛

右浦々連判

右之通私共粟津浦へ罷越詮義仕い所双方得心仕ニ付書付取指上申い以上。

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

八四

己極月七日

木戸藤左エ門

三良左エ門

四宮欽太兵衛様御手代殿

(8) 乍恐奉願上覚

一里岡崎林崎諸魚五分一之義、去ル寅ノ三月晦日々当子二月朔日迄丸年拾ヶ年之間御運上銀札四貫五百目所請繼ニ被為仰付浦人共一統難有奉存也。然処近年打続不漁仕也上去ル酉ノ穉度々之風雨大潮打ニ大手圍打越漁船漁具網等迄破損流失仕当時漁業可仕様も無御座其上田畠一円立毛潮枯ニ罷成諸俵子流失仕飢同然彼是迷惑奉仕也ニ付、御米御拝借奉願也御慈悲之上去戌三月ニ御拝借被為仰付取続難有奉存也。右御願餘有ヲ以漁船漁具古網相調繕イ等仕取続漁業仕也得共、里浦漁業場所之儀ハ根元海悪敷之処近年度々之風雨大波ニ海浅ク罷成殊ニ片灘ニ御座也得ハ平生浪荒キ場所故漁船不残砂浜へ耆丁余も掻登し置

御座也得ハ、鰯浦へ寄り節船拵等仕乗出し申也と奉存也内ニ大波立申様之浦柄ニ而漁事不仕、又々船掻登し罷戻り申儀^(ム)ニ而御座也故、兎角不漁仕迷惑奉仕也上去ル戌ノ二月ニ櫓かい不残盜至極迷惑奉仕漁業指止居申也。然共漁業時節向ニ得ハ乍迷惑少々宛他借等仕漸櫓かい相調漁業仕也得共、兎角不漁仕ニ付特と迷惑奉仕也。別段ニも申上通地方之義ハ根元砂田畠ニ而土地悪敷也上去ル酉ノ秋風雨高潮打以來弥々田畠土地悪敷罷成、殊ニ去ル戌ノ年度秋并昨年夏秋大旱ニ作柄打続不作仕去秋御年貢上納方便無御座禱と迷惑奉仕也ニ付、少々宛相扣也田畠^(ム)物迄売払ひ月廻迄ニ漸行道相調也程困窮浦人共至極迷惑奉仕乍恐御慈悲之上浦人とも御救と被為思召上当子ノ三月朔日々来ル戌二月晦日迄丸年拾ヶ年之間五分一御運上銀札四貫百目ニ被為仰付被下也ハ、浦人共取続漁業可仕と難有奉存也。御時節柄之御義御運上御減少奉願上鍛段重々奉恐入也得共、右二段々申上通彼是打続浦人とも至極困窮仕居申儀ニ御

座に問何卒御慈悲之上奉頼通所請継ニ為仰付被下
ハ、一統難有可奉存也。以上。

(明和五年)

里浦庄屋 元 八

子正月 同浦五人組 吉 平

同 全 助

同 長 助

同 新 六

同 安 治 郎

新見圓次兵衛様

(9) 御鍛ニ付申上の覚

一里岡崎林崎三ヶ所諸魚五分一御運上銀四貫五百目拾
ヶ年所請継ニ被為仰付当二月晦日年明きニ付、当子
三月朔日夕来ル戌二月晦日迄丸年拾ヶ年御運上銀札
四貫百目ニ所請継被仰付被下の様先達而奉願也所、
右銀高二而ハ難被仰付ニ附増銀御鍛之義被為仰出奉
畏也。然処先達而も申上の通近年不漁打続い上去ル
酉ノ秋雨高潮打ニ漁船漁具網等迄破損流失仕浦人共

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

至極相痛迷惑奉仕也。其上地方之儀を打続不作仕
と行詰り迷惑奉仕の儀ニ御座い得を、先請も相増し
奉願段困窮仕居申浦人共ニ得ハ増銀奉願段難相調
迷惑奉仕い得共、随分相増不申也而ハ入札ニ可被為
仰付旨御鍛被遊いニ付入札ニ罷成外請ニ被為仰付
也而ハ弥以碁と行道無御座漁師共在所相放申外無
御座迷惑奉仕也。随分出情仕四百目相増都合四貫五
百目先請之通所請継ニ被為仰付被下也ハ、右年数
之内只管漁事等仕い得ハ浦人共取続漁業可仕旨奉存
也。此度被為御念入御鍛ニ付先請御運上銀何卒増銀
奉願度奉存い得共先達而段々申上の通、里浦漁業場
所之儀ハ近年度々之風雨大浪ニ海浅ク罷成殊ニ片灘
ニ候得ハ平生浪荒キ場所故兎角不漁仕い上、作方ハ
別而打続不作仕至極迷惑奉仕居申儀ニ御座い間、乍
恐御慈悲之上右之段被為聞召届奉願通御運上銀札先
請之通四貫五百目ニ被為仰付被下也ハ、難有可奉存
也。敢早此上ハ増銀得不仕也。外請ニ被為仰付い迎
も申上分無御座也。然共外請ニも被為仰付也而ハ漁

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

八六

師共所相放申る外無御座の間、因窮浦人共御救と被為思召上御慈悲之上所請繼ニ被為仰付被下ハ、浦人共一統難有可奉存ハ。以上。

(明和五年) 里浦庄屋 元 八

子二月九日 同浦五人組 安 治 郎

新見田次兵衛様

(10) 御鍛ニ付申上ハ覚

一里林崎岡崎三ヶ所魚請之儀ニ付、尚又別紙之通奉願ハニ付、先達而段々御鍛之節先請御運上銀高二而ハ少も徳用無御座ハ。然とも片灘之義故外請ニ相成ハ而ハ浦人とも迷惑仕ニ付、先請御運上銀式百五拾目御鍛増仕、此上増銀得不仕ハ。然上ハ外人へ被遣ハ迎も申分無御座ニ而申詰^(ムシ)ニ付、私とも願之義ハ先請式ヶ年相増年数相延ハ得ハ先請銀高増銀ハハ不思召ハ得とも御救同断之願と被思召申ハ上右様ニ申詰ニ附私とも願書御指上被遊ハ。然処入札ニ被為仰付ハ旨被仰出ハニ付右様ニ願書ハ段、別而不埒ニ被為

思召ハとも落札ハ少々とも相増ハ義故御為ニ相掛申上、外請ニ相成ハ而ハ浦人とも至極迷惑成趣ニ付、先願紙面之義ハ御請持罷^{ムシ}御讚談被遊可被為下と被仰渡難有仕合ニ奉存ハ。右ニ付猶被仰聞ハ、三ヶ年請々被仰付外如何程之高札申ハとも右落札銀高三拾目相増御請仕処弥相違無御座ハ。尚又重々御鍛□□三ヶ年請ニ被為仰付如何程之銀高落札ニ御座ハとも右落札二三拾目相増奉願処少も相違無御座ハ。先達而重々御鍛ニ外入へ被出ハ迎も得増銀不仕ハと申上置、又ハ哉右様之願申上ハ段御静論之程迷惑奉仕ハ得とも申談ハ処、兎角外請ニ相成ハ而ハ至極難洩迷惑之品御座ハニ付奉願義ニ御座ハ間御慈悲之上被為聞召届被下ハ、重々難有可奉存ハ。以上。

亥ノ二月 里浦庄屋 安 五 郎

五 人 組 久 太 兵 衛

所 分 兵 衛

喜 右 工 門

菊 右 工 門

坪内庄兵衛様御手代

笹倉善兵衛殿

(11) 覚

銀札貳百三拾四匁六分

但式歩利とも

右者板野郡里林崎岡崎三ヶ所諸魚運上銀当申十一月上納相済処如件。

笹倉善兵衛 ㊦

安永五申年十一月廿日

里浦庄屋 元 八 殿

(12) 仕上ル書物之事

一銀札四貫六百目

但し当申三月朔日ヨ来ル午二月晦日迄九年拾ヶ年

老ヶ年ニ四百六拾目宛毎年六月霜月両度上ヶ老ヶ

度貳百三拾目宛式歩相加へ指上ル筈

右者板野郡里浦岡崎林崎三ヶ所諸魚五分一御運上銀当

江戸時代漁業に關する若干の史料(津川)

申三月朔日ヨ来ル午三月晦日迄九年拾ヶ年所請繼ニ被為仰付御請仕ニ付、別紙質物証文指上ヶ申。漁業場所海境其外御法度之儀ハ先請之通堅相守可申。御運上銀之儀右之通無滯上納可仕、依御証文指上申処相違無御座。以上

天明八申年四月五日上ル

板野郡里浦庄屋 元 八

同浦五人組 大 藏

菊左衛門

林右衛門

專 助

惣 十 郎

伏屋岡三郎様御手代

伊 川 理 喜 藏 殿

(裏端書)

魚口御運上請繼被為仰付御請元証文扣

(13) 天明八申四月五日 并質物書扣

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

八八

仕上ル書物之事

一家 老軒 四間半ニ八間礎瓦葺

代銀札四貫目

一同 老軒 式間ニ七間礎葺葺

代銀札六百目

合四貫六百目

右は板野郡里浦林崎岡崎三ヶ所諸魚五分一請所当申三月朔日々来ル午二月晦日迄丸年拾ヶ年御運上銀四貫六百目所請繼被為仰付難有私請人ニ相立テ、則私所持之家五人組共直段付仕右之通質物ニ指上申也。尤右家外質物ニ書入申儀無御座也。万一御運上銀札少しニ而も指支不埒御座也ハ、右質物之家早速估却仕御運上銀札無滞指上可申也。為其証文指上申所相違無御座也。以上。

請人板野郡里浦庄屋 元 八

天明八申年四月五日

伏屋岡三郎様御手代

伊 川 理 喜 藏 殿

右之通元八家質物ニ書入請人ニ相立御運上銀札御請相仕処相違無御座也。右御運上銀少しニ而も相滞也ハ、右直段付之通売立上納可仕也。万一売不足等御座也ハ、私共相弁御運上銀少も無滞上納皆済可仕也。仍而奥書仕指上申処相違無御座也。以上。

申四月五日

板野郡里浦五人組

(14) 乍恐奉願上事

一当浦諸漁手御益之義、往古八年請ニ被仰付漁業仕来也。近年御国中一統御年口ニ被為極、右魚口御取立私共下役被為仰付、是迄相動居申也、近年不漁打続御益も薄ク罷成奉恐入也。然処一昨年已来株付御取調并田地調印被仰付、御用繁多ニ罷成右取立方迷惑仕居り申也、漁師一統申出也ハ、何卒御慈悲ヲ以先年之通所請ニヒ為仰付ヒ下様御願申上呉様申出也ニ付、銀高何程ニ御請仕義哉と相尋也。老ヶ年ニ付銀老ヶ目宛三ヶ年三貫ニ御請奉仕旨申出也ニ

付、右銀高二而ハ今少し不相応と奉存旨漁師共え重

々入割を聞出情仕らせぬ処、今式百目相増都合忝貫

式百目宛三ヶ年分三ノ六百目先年之通所請ニヒ為仰

付ヒ下ぬハ、難有可奉存旨申出ぬ。随而当浦之義ハ

淡刃御渡海御用ヒ為仰付、先年ノ相勤居申処元文年

中之比飛船御用相増外ニ飛船老艘相応居申処、右飛

船之義ハ往古ハ堂浦北泊土佐泊右三ヶ浦ノ相勤居申

処、元文中之比右御用当浦ヘヒ仰付迷惑之旨奉願

ぬ処、其後御慈悲ヲ以五ヶ年請銀四ノ六百之所拾ヶ

年請ニヒ為仰付、右餘銀ヲ以飛船新ニ相替并水主三

人相雇相勤居申処、近年御年口ニヒ仰付右餘銀も無

御座右船修覆料水主雇賃ニ行当り迷惑奉仕ぬ義ニ御

座ぬ。恐多奉存ぬ得共前段奉申上ぬ通所請ニヒ仰付

御政道も御座ぬ得ハ、当申八月一日ノ来ル亥ノ七月

晦日迄九年三ヶ年之間、銀三ノ六百目、老年ニ付老

ノ式百目宛所請ニヒ為仰付ヒ下ぬハ、漁師共始私

共迄難有仕合ニ可奉存ぬ。以上。
江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

(文化九年)

申七月

里浦庄屋

同浦五人与不残

御郡代様御手代

辻永次兵衛殿

(15) 乍 恐 奉 願 上 覚

一 蛤漕船 忝艘 当浦 何 右 工 門

一 同 忝艘 何 右 工 門

一 同 忝艘 何 右 工 門

ノ 船数 何 拾 何 艘

此 御 免 札 料 何 拾 何 匁

但し 老 ヶ 年 分 老 艘 二 付 式 匁 宛

右ハ今切川筋蛤漕漁業御免被仰付御免札被下置度旨願
出ぬ。尤御運上銀之義は本冬之通毎年十一月切ニ無滞
私共ノ取立上納可仕ぬ。尤御免札毎年奉願ぬ而は迷惑
仕ぬ間、増減等御座ぬ節ハ時々奉願ぬ様被仰付被為下

（江戸時代漁業に関する若干の史料（津川））

九〇

い様御自分も可然様被仰上可被下い。右之段書付ヲ以申上い処相違無御座い。以上。

里 浦 庄 屋
五 人 組 印

文政四年巳十一月五日

大松村組頭庄屋

近 藤 好 助 殿

(16) 乍恐再応奉願上覚

私儀先達而鰯縛網新職并ニ漁具元入御銀拝借奉願上い所、御払下ケ被仰付罷歸り色々心配仕い処、漸銀主相求漁具之儀は相応新ニ出来仕い筈ニ付而は、何卒御慈悲を以右網新職御免被仰付ヒ下い得は難有仕合ニ奉存い。随而御払下ケ之御願書并ニ絵図面仕扣書共請人連判を以奉願上之処相違無御座い。以上。

明治四年四月

板野郡櫛木村 八 谷 嘉 吉 ㊤
同 村 小 森 房 太 郎 ㊤

北民政産物御役処様

右之通当村八谷嘉吉儀受人連判を以再応奉願上い段相違無御座何卒御慈悲を以右者奉願上い通ヒ仰付ヒ下い得は右者は不及申上私共迄難有仕合ニ可奉存い依而奥書仕奉指上い。以上。

未四月

板野郡櫛木村与頭

北民政産物御役処様

藤 家 伝 弥 ㊤

三、漁場入会および論所に関するもの

(17) 御尋附申上覚

一鳥ケ丸宿毛谷北泊り九万疋網出入ニ付、私共村九万疋網北泊浦を去々年指留い様彼浦を庄屋五人組申上い由ニ而、私共被召寄指止い哉と御鍛被遊い。尤去々年北泊り庄屋方を申越いハ、私宅へ召寄右之趣申聞いへハ、漁師共申い者、根元御自分御聞及之通先年出入落着之時節を彼是と申、鱧網四状鰯網三帖其外小魚仕来い。然所ニ北泊りも追々網出来仕い。其後鰯網四帖仕いニ附纒々之浦ニ右網八帖年数余程仕

居申処ニ以之外不漁ニ付、相互ニ不勝手ニ被存ハ故
拾五六年以前ハ鱧網ヲ九万疋網三帖仕直シ取来申ハ
ニ付、只今差止申儀不能成旨ニ而、去々年迄九万疋
取来リハ。右申上ハ通少も相違不申上ハ。以上。
元文五申年二月五日

折野村庄屋 六 左衛門
同村五人組 安 之 丞

喜 三 右衛門
六 右衛門
政 右衛門
伊 兵衛

四宮歛太兵衛様

御手代 遠上通左衛門殿

右之通仕迄前々之通漁仕ハ様ニ被為仰付ハ事也。

(裏端書) 朱ニテ 裁判所差出書類 第七号

(18) (裏端書) 安永二巳閏三月廿七日

別宮浦庄屋快太方ニ而承リ候浜境書扣

江戸時代漁業に關する若干の史料(津川)

別宮浦海川境大磯せいが鼻籠、新町川、今切ハ広嶋渡
場迄、北鍋付三ツ合徳長わくの鼻迄漁業仕来リ之場所
元ハ粟津浦におゐて漁業浦一向無之哉ニハ得ハ粟津ニ
入合之場所無之ハ勿論里浦別宮浦ハ往古ハ入相ニ而右
之場所之外海内川とも漁業入相ニ仕来リ申所少も相違
無御座ハ右之通立姿申ハニ付浜境之通書留置申ハ。

巳閏三月廿七日

右ハ快太宅へ元八藤越先年ハ里浦別宮漁業之義往古ハ
入合ニ仕来リ居申処長原之漁師共彼是申ニ付快太方へ
詰開ニ元八五人組吉平同道ニ而罷出相尋ハ所右之通快
太申出ハ、其後申十二月亦々彼是申ニ付御郡所様ニ而
御札之砌御糺書ニ快太長原五人組□右エ門入合之処相
違無之旨申出書付御取被遊ハ。

(19) 乍 恐 奉 願 上 覚

一里浦別宮浦諸漁業場外海内川筋往古より入合ニ仕来
リ申ハ右ニ付当浦漁師共中喜来川筋岡崎林崎川筋別
宮浦川筋ハ長原大岡津田川迄も蛤漕ニ罷出ハ義冬分

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

九二

る正二月頃迄之渡世ニ仕来居申い右ニ付別宮内川筋へ当浦之者共蛤漕ニ罷出居申所、別宮浦之内長原之漁師共此節彼是と不埒申相障申に付、当浦漁師共申いハ、先規も入合浦ニ而仕来之旨申聞い得共聞入不申申募い得ハ、押合双方怪我人等も出来い而ハ不相濟様ニ存右様相障申いハ、別宮浦役人中も申付い義哉と再応入割申聞い得共、一向聞入不申ニ付、当浦漁師共別宮浦庄屋森快太方へ罷越、長原之者共毎々不埒ヲ申相手成い得ハ漁具等相痛申様罷成、短日之時節渡世之害成至極迷惑仕い。私共義往古も入合浦ニ而外ト海内川筋蛤漁之義仕来申分ニ得ハ御指留之子細承り度い。弥相障被成筋も有之いハ、里浦役人中へ書状被遣度旨当浦漁師共快太方ニ而重々詰開ニ及い処、快太申いハ、入会と申義ニ而ハ無之い得共仕来り申い得ハ彼是不申様、長原ニ兄当左工門居申い此方へ書状遣可申い。此状持参い而蛤引可申旨快太申いニ付、当浦漁師共申いハ入合ニ無之い得ハ往古も面々参来筈無之旨快太へ対し申い処、快太

申いハ、彼是不申及蛤引い得ハ事足り申義ニい旨申ニ付、漁師共右書状長原ニ居申当左工門方へ持参参い処、当左工門留主ニ而御座い故、懸魚分一所手代へ相渡有来通蛤漕ニ罷出居申い処、一兩日仕又々長原漁師共彼是不埒申相障申趣、当浦漁師共私共手元申出へい。毎々右様不埒之義申い段ハ別宮浦役人共甚不行着成義と奉存い得共、御役所様江申上い段ハ奉恐入是迄指扣居申い。且四五年以前も兩度迄彼是申い得共、其節も夫成ニ罷成致来之通漁業ニ参申いニ付其通ニ仕置申い。然共度々不埒申い義ニ御座い得ハ前廉之運とも乍恐左ニ奉申上い。

一 去ル辰霜月九日当浦漁師共蛤漕ニ参り居申い処、其節も前段之通長原漁師共申いニ付、当浦漁師共之内兵右衛門庄左衛門善六庄左衛門儀右衛門右五人快太方へ罷出重々詰開仕い所、快太申いハ、里浦ハ入合ニい得ハ指留申義ハ無之長原之者共彼是不申様長原五人与へ申遣い間此書状持参い様快太申ニ付右書状長原ニ居申五人与為右衛門方へ漁師共持参仕申い

処、為右衛門申ハ勝手次第二蛤漕ニ参リハ様申ハ。
 右之仕合其通ニ而其後長原漁師共障リも不申ハ。然
 処翌年己ノ十一月蛤漕ニ参居申所又々前段之懸不埒
 申ハ旨当浦漁師共私共手許へ申出、何分別宮浦役人
 中江書状指遣呉ハ様漁師共申出ハニ付、庄屋森快太
 方へ申遣ハ、里浦別宮浦往古ノ諸漁業入合ニ致来
 ハ場所ヲ、長原漁師共内川筋ハ蛤漕調不申旨毎々彼
 是不埒申ハ趣、右ニ付当浦漁師共每度不時ニ持ヲ指
 止メ甚難波仕義ニハ得ハ、彼是之筋等出来之義有之
 ハ而ハ互ニ気毒ニ存ハ間、其浦漁師共以來彼是不申
 ハ様御了簡被成度義と存ハ。然共思只寄之筋も有之
 ハハ、被仰聞度存ハ。右之段為御念御鍛ニ被仰聞可
 被申ハ。右様申遣ハ所何之返答も不仕ニ付漁師共返
 書取ニ度々遣ハ所、承知仕ハ趣口上ニ而返答迄仕
 兎角返書指越不申、又々書状ヲ以再応申遣ハ処一向
 何返書も指越不申ニ付勝手次第二罷越ハ様当浦漁師
 共へ申付ハニ付仕来之通蛤漕ニ参居申ハ。然処又は
 哉此度右様前文之通彼是申相障申ハ段ハ餘リ不行着

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

成義と奉存ハ得ハ、重々恐多奉存ハ得共不取止事御
 願申上ハ。此度も夫成ニ相濟置ハ而ハ当浦漁師蛤漕
 之者共不時ニ持ヲ指止メ申義毎々ニ而至極迷惑奉仕
 義ニ御座ハ旨申出ハニ付、無坳右之段奉願上ハ。御
 繁多之節奉恐入ハ得共御慈悲を以、別宮浦庄屋五人
 与被召出以來右様之不埒不申様御行着被為仰付被下
 ハハ、漁師共一統私共迄難有奉存ハ。以上。

安永五年申十二月九日

里浦庄屋

元 八
 吉 平
 金 助
 長 助
 大 蔵
 春 治

林小八郎様御手代

笹 倉 善 兵 衛 殿

(20) 御尋ニ付申上ひ覺

今日私被共召出、被仰聞ひハ、別宮浦漁業之場所里浦
 外ト海并内川筋共往古も入合ニ仕来りひ旨、里
 浦役人共申出ひ。然所内川筋ニ而里浦漁師共蛤漕ニ罷
 出ひ処、近年別宮浦之内長原漁師とも相障迷惑之旨書
 付を以申ひ。如何相成相障ひ義哉、漁業場所入合之義
 委再可申上旨被仰渡承知奉畏ひ。外海之義ハ往古も入
 合ニ仕来申ひ。内川筋入合ニ仕ひ義ハ無御座ひ。并里
 浦漁場と申場所別宮浦内川筋之分ニハ無御座ひ旨申上
 ニ付被仰聞ひハ、里浦漁師共蛤漕キひ義別宮浦漁師外
 ト海内川筋共往古も入合ニ仕来居申段相違無之旨申出
 有之ひ。其上近年迄も何以故障不仕ひ場所を今更新ニ
 彼は申段不相当義と被思召ひ。然とも格別之子細も有
 之ひハ、其段委再可申上旨被仰聞ひ。近年ハ別宮浦
 漁業殊之外無数御座ひニ付而ハ、内川筋ニ而里浦漁師
 共同断ニ蛤漕居申ひ。外海漁事多御座ひ得ハ内川筋之
 漁持ハ繁ク不仕ひ。別段ニ申上ひ通外ト海漁事無数御
 座ひ故、漁師共里浦漁師共へ対し時至彼是障仕義と奉

存ひ旨申上ひニ付、別宮浦漁事不限多少ニ先年も仕来
 り之通、里浦漁師共へ障り不仕漁業致させ申義と被思
 召旨、於私共ニハ被仰聞ひ御道理至極ひ。以前之通里
 浦漁師共と外ト海内川とも入合ニ漁業仕方と奉存ひ。
 猶在所へ罷歸り漁師共へ被仰渡之委再申聞追而、漁師
 共御請仕ひ趣御答可申上ひ。尤漁師共之内不弁之者御
 座ひハ、其段追而可申上ひ。

右段々御糺ニ付申上処少も相違無御座ひ。以上。

申十二月十二日

別宮浦庄屋 森 快 太

同浦之内長原

五人与 紋 右 衛 門

林小八郎様御手代

笹 倉 善 兵 衛 様

漁海出入ニ付指上書付ひかへ 申八月

(21) 乍 恐 申 上 ひ 覺

長原里両浦漁海出入再応御行着被仰付一昨年春数度両

浦御呼出被仰付御取扱被仰付^レニ付、兩浦一和內濟書付ニ印形仕指上御座^レハ其後長原浦^ハ彼是故障ケ間敷儀杯申立右內濟書付之表相變、猶又大ニ御苦勞奉懸免角相行着不申^レニ付、當春兩浦丁數御取調子被為仰付那六新田中土手建石通ニ兩浦境御建御仕居ニ被為仰付^レ御趣ヲ以、右境^ハ百九拾壹間北へ寄せ漁海境として右境処都而長原へ相渡^レ哉と重々御取扱被仰聞迷惑奉仕^レ。尤一昨午年御行着之節も中網漁之義、當浦^ハハ長原海半數之御仕置ニ相成長原^ハハ當浦大磯迄都而漁事相調^レ様御仕置被仰付、當浦中網漁海半數相減居申^レ。且右浦之義は漁海場広ク^レ上、別而網代宜敷御座^レ。當浦之義は漁海狭ク其上大磯辺汐行至而早ク六七丁程も海底生へ岩ニ而網入心儘ニ相調不申、網代不宜御座^レハ段鍛崎へも度々申上御座^レ義ニ御座^レ得共右百九拾壹間之間段々御入割ヲ以御取扱被仰付^レニ付存分申作^レ而も奉存^レニ付、右場処大網并中網とも被浦^ハ先網出^レ様被仰付^レ様申上御座^レ。尤今度御仕置成^レ浦境迄當浦地ニ御座^レ得ハ、折々浦役等も御座^レ事ゆ

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

へ鰯網之義は當浦^ハ先網遣申し度旨漁師共強申出^レカニ御座^レ。尤先年^ハ鰯網之義ハ出入成不申先年^ハ持続^レ漁具ニ御座^レ得ハ、成來^レ之通右漁具持懸^レ而長原津田兩浦とも入合漁相調^レ様御仕置被仰付可被下^レ。且又鰯網成來^レ之通漁事相調^レ方と相心得^レ事ゆへ、右百九拾壹間之間彼浦へ大網中網漁相渡申^レ如ニ御座^レ。當浦^ハハ大網漁仕間敷、中網之義ハ彼網ニ而御座^レ。將亦拾五ヶ年已前午年兩浦漁海出入申請書之表ニ小網之義ハ、苧網繩網共百六拾尋と相記御座^レ旨被仰付、此如ハ當浦漁師共ニおいてハ片手ニ相心得居申義ニ御座^レ。右様之小網當浦ニハ先年^ハ是迄無御座^レ。當浦鰯網之義は苧網五拾尋位、繩網式百四拾尋位ニ而惣長式百九拾尋位ニ而、先年^ハ持伝へ居申漁具ニ而御座^レ。長原鰯網ノ義も大体當浦漁具ニ相応仕居申義と奉存^レ。尤右浦ニハ鰯網^ハ小手網御座^レ義ニ奉存^レ。前文拾五ヶ年已前午年御鍛之節右小網丈尋御極之義、長原漁師共手前御聞合之上御極被成^レ義と奉存^レ。當浦ニハ先年^ハ今以右様之小網無御座^レニ付而

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

ハ、其節当浦漁師共手前疋と御尋も無御座の義と奉存
 い。先達而も申上り通鯛網之義ハ彼浦へ対し出入成
 不申義ゆへ丈尋御読聞之節当害ニ奉承知の義と奉存
 而ハ漁師共不調法ニ落沈の時ハ奉恐入義ニ御座い。乍
 併先年も持伝へい漁具ニ御座い得ハ、持懸り漁具ニ而
 成来り之通入相漁相調の様奉願呉の様重々申出の義ニ
 御座い。午年申請書ニ相記有之い漁具ニ而ハ一向鯛漁
 事相調不申鯛網之者共別而迷惑奉仕義ニ御座い。当浦
 鯛網之者共迷惑仕い得ハ長原鯛網之者共も右小網ニ而
 は網取し不申い得ハ、同断迷惑仕の義と奉存い。此段
 之義ハ両浦漁師共相互之義ニ御座い得ハ、持懸り漁具
 ニ而成来り之通漁事相調の様幾重にも奉願上呉の様漁師
 共申出の義ニ御座い。右之段宜敷御極成被仰上被下い
 ハ、漁師共私共迄難有仕合ニ可奉存い。以上。

申八月

里浦庄屋五人組中

齋 賀 近 田
 藤 川 藤 淵

(22)

寛政十二申極月廿四日

長原之者共冬彼是故申ニ付尚又塩方御代宮様御役所へ奉願
 書付

乍 恐 奉 願 上 覚

一里浦別宮浦漁業場所之義、外ト海内川筋共往古も入
 合ニ仕来り居申ニ付諸魚漁事仕、冬分ニ至い而ハ当
 浦蛤漕漁師共別宮浦外ト海内川筋蛤漕々罷出来居申
 い処、近年ニ至長原之漁師共入合ニ而無之抔ト不埒
 之族申の義毎々ニ而御座い。然所当九月十三日当浦
 江戸脇別宮浦海江当浦漁師共罷越沖合江網置付い
 処、長原漁師共大勢罷越利不尽ニ当浦善六網之漁具
 沖合ニ而取もき、則網袋取帰りのニ付善六網ニ相懸
 居申漁師二十人程之家内漁事指止至極難渋迷惑奉仕
 ニ付、九月十五日右之段書付を以御郡長浜猪三郎様
 奉願い所御用繁多哉早速御下知も無御座いニ付、大
 勢之家族等と迷惑奉仕并外網師共も漁事ニ罷出い而
 も亦い哉、長原之者共右様之族不埒仕の様ニ有之い
 而ハ喧嘩口論出来仕合ニ而怪我人等出来い程も難斗

奉存ニ付漁事罷出い義指扣させ御座い得共、右善六網ニ相懸い者共ハ勿論外網漁師共迄漁業指止居申且御年口之義ニい得ハ五分一銀被召上い御上御為も欠ケ申ニ付、尚又九月廿日右之段申上い処、御郡様別宮浦役人共方へ御書被遣長原五人ハ漁師里浦役人共漁師立會長原江取帰りの網袋請取い様ニ被為仰渡廿二日網袋請取其日ハ有來通漁事仕難有奉存い。尤廿五日ニハ善六并網子老人外ニ式人漁師為惣代召連罷出い様被仰付奉畏居申処、善六義廿三日暮方ハ持病之疝積指起り食事一向食べ不申歩行難相調迷惑奉仕ニ付、善六病氣少快迄御日延書付廿四日ニ指上申い。廿五日ニ長原漁師廿四人罷出居申い処、不埒之仕成ニも被為思召被成右四人之者共市中旅店ニ七日御追込御咎メ被為遊い御趣ニ御座い。然所当浦漁師共仕來い通漁業ニ罷越網遣置付漁事ニ相懸いト、又々長原漁師共罷越申いハ網遣りい義不相調網遣りいト取もき申い不埒之族申指留故障網三帖遣りいを老帖式帖ニ而事足シ仕合能漁事仕義も彼是邪魔

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

を入相障不漁無漁仕ニ付当浦漁師共至極迷惑仕旨申出い。右様不埒之族等申ニ付而ハ当浦漁師共程漁能事も得不仕網師漁師大勢之者共至極難迷惑奉仕い。且亦右様ニ長原漁師共相障申ニ付而ハ第一御上五分一御為ニも相懸り申義ニ御座い。敢早此比ハ追々外海内川筋漕漁事之時節ニ罷成い得ハ、先年ハ仕來之通蛤漕漁業ニ罷越申義ニい得ハ、是亦彼是不埒等申故障申様ニ罷成而ハ冬分ハ春ニ至渡世之業等ニ大勢之漁師共犇と迷惑奉仕い得ハ、乍恐御慈悲ヲ以別宮浦役人共長原漁師共御役所様江被為召出当浦漁師共漁業ニ罷越い而も彼是不埒之族不申様御行着被為仰付被下いハ、難有可奉存い。

長原漁師共前段申上い通我儘不埒之族等申義、当浦漁師共も大勢御座い義故相手成い義彼是申出い得共、右様相手成い様に御座い而ハ喧嘩口論沖合ニ而怪我人御座い様ニ罷成い而ハ、御上江括義之御苦勞奉懸い様ニモ相運申義難斗、漁事仕義指文い而ハ五分一御為も欠ケ申義ニ御座いニ付、当浦漁師共へも

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

申付喧嘩口論等ハ不仕様ニと申聞置御座い得共、廿日ニ至長原漁師共数度彼是不埒之族申ニ付漁業之妨ニ相成至極迷惑奉仕旨申出い。且亦長原漁師共之内不弁之者別宮浦ト里浦トハ入合ニ而無之杯ト申義ヲ表ニ申立右様不埒申出い義ト存い。里浦別宮浦外海内川筋とも入合漁業仕来い段ハ数百年経往古々入合漁業仕来居申義ニ而御座い。内川筋蛤漕場所之義別宮浦指越津田浦内川筋迄蛤漕漁業ニ参り来りい得共、先年々是迄津田浦漁師共々少も故障申出い義無御座い。尤諸魚網漁之義津田浦外海へ罷越い義ハ無御座い。別宮浦之義ハ牛房刈内川筋は別宮漁師罷越い場所迄ハ先年々入合仕来居申ニ付当浦漁師共罷越申義ニ御座い。

一安永五申十二月、里浦漁師共蛤漕ニ別宮浦川筋へ罷越居申所、別宮浦之内長原蛤漕漁師共此度之様不埒申相障り申ニ付、当浦蛤漕漁師迷惑奉仕ニ付御郡林小八郎様御在勤中之砌、右之段奉願上い処、別宮浦先庄屋森快太長原五人組紋右エ門并漁師共六七人御

役所様へ被召出、庄屋五人組手前々里浦別宮浦入合之義御尋御札被遊い上、小八郎様於御役所様ニ書付御取被遊い上、其砌里浦役人共漁師にも其節御役所様へ罷出居申い所、里浦之義外海内川筋とも仕来之通漁業仕様ニ被為仰渡いニ付、往古々入合ニ仕来之通外海内川筋共漁業仕様ニ御座い。今年廿五ヶ年以前ニ而其節之運別宮浦庄屋五人組御札書之写共委再書付、当月十日御役所様江別段ニ書付奉指上通ニ御座い。先庄屋五人組廿五ヶ年以前別段之通書付指上御座い義ニ御座い得ハ、長原漁師老年之者共ハ能存居申義ニ御座い。然所近年度々彼是不埒申相障り申段ハ兎角不弁之者彼是族申出い。夫ニ付大勢之者共も組先キ不相弁我儘不埒申出い義ト乍恐奉存い。尤唯今之庄屋五人組何は相工ミい様さしも有之故ニ、長原漁師共右様利不尽成仕成シ不埒申出相障申義哉、如何敷奉存い。昨年々今年至度々相障り申ニ付、当浦漁師共様々迷惑奉仕義ニ御座い得ハ、御繁多之御時節ニい得共御慈悲を以何卒別宮浦役人長原漁師

共御役所様へ被召出彼是故障不申様御慈悲之御行着
稠敷被為仰付被下いハ、当浦漁師共一統私共迄冥加
至極難有可奉存い。以上。

申十月廿四日

里浦庄屋 元 八

同浦五人組 菊 左 門

林 右 門

夫 平

左 治 郎

仲 之 丞

安宮 □左衛門様

岩崎猪源太様 御手代中

長江郡之助様

(23) 御郡様方御書

蛤漕出入相片付い迄漁事仕い様宮嶋へ

急度申置い。別宮浦漁師共ニ対シ里浦漁師共方内川筋

ニ而蛤漕い義ニ付彼是書付ヲ以申出い義ニ付、右網之

義其方并三郎左エ門へ申付い。勿論右調へ相片付い迄

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

ハ唯今迄仕来之通入合ニ漁業全無指支別宮浦漁師共へ
可申付い。尤荒立い浦人共へ右申付之請書仕り来十九
日可指出い。以上。

申十一月十七日

林 小八郎

宮嶋浦与頭庄屋

沢口助之丞とのへ

(24) 御尋ニ付申上ル覚

一當浦漁場境目之分、北ハ大磯方南芝山ノはな右之内

江戸口方大磯迄里浦入合ニ仕い并津田浦入合ニ仕い

一内川上ハ板野郡中富村継場切、南名東郡疋田村、傍

示川高崎村上助任村鳥が森切、北ハ高房村源九郎池

之口迄、広嶋助浦之場切江戸内川両地瀉付川三つ境

わくのはな切。

右之通當浦漁場之義御尋ニ付右之通書付ヲ以申上い。

以上。

年号不詳

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

一〇〇

別宮浦庄屋 快 太

理 右 工 門

新 右 工 門

源 左 工 門

宮 嶋 与 頭 へ

(25) 乍 恐 奉 願 上 覚

一 当月九日当浦漁師共網三帖長原洲崎へ罷越漁業仕
 処、長原漁師共之内政六ト申者漁業ニ罷越当浦之網
 三帖遣イ居申内一帖善六網ヲ相手取り申いは、里浦
 之漁師共何ト心得い而網遣イい哉、網引事不調杯と
 彼是故障仕、善六網沖合ニ置付御座い網ヲ大勢罷出
 指留終ニ漁事仕不申、右之仕合当浦漁師共も敢早堪
 忍成不申口論ニ相及い処、兼而私共申置御座いハ
 右様沖合ニ而漁業ニ付万一彼是申いとも口論ケ間敷
 儀不仕様申聞、故障之儀御座いハ、乍恐御上江申上
 い儀と申聞置御座い得ハ、右申付之儀ヲ相守堪忍難
 成処ヲ其儘ニ仕罷帰り、早速八日七つ時私共手元迄

右之運申出来り申いニ付、右之段奉申上い地盤出入
 成い儀ニ而ハ御座い得共、右出入今以御落着も無御
 座右之仕合往古々仕来之通漁業仕居申儀ニ御座い。
 尤去申九月当浦漁師善六網ヲ対し彼是申い儀ハ先達
 而紙面ヲ以申上置御座い通、其後ハ当浦漁師とも当
 月九日迄右之場所ニ而漁業仕来り居申処、八日ニ至
 り指留故障申儀如何相心得右様ニ申儀ニ而御座い
 哉、不相当儀と乍恐奉存い。左い得ハ当浦之漁師共
 右出入相片付い迄ハ長原洲崎へ罷越漁業仕儀不相調
 様ニ相運ヒ是迄仕来い儀ヲ、今更右様ニ相成い而は
 至極迷惑奉仕い間、乍恐御上御慈悲ヲ以長原漁師政
 六被召寄往古々仕来之通先右出入一件相片付い迄
 ハ、長原漁師共当浦漁師共ニ対シ彼是故障不申出様
 先年より仕来之通漁業仕い様、御役所様へ被召寄右
 奉申上通稠敷御申聞被為遊被下いハ、重々難有奉存
 い。即去申拾月徳嶋於御役所様ニ指上御座い紙面之
 写も別紙ニ相添指上申い。御繁多之御上恐多奉存い
 得とも何卒右之段御慈悲之上急々御行着被為遊被下

いハ、漁師共一統私共迄冥加至極難有可奉存い。以上。

酉九月十日

里浦庄屋 元 八
同浦五人組 菊 左 門
同 林 右 衛 門
同 夫 平
同 庄 治 郎
同 記 八 郎

御郡代様御手代

曾 我 辺 繁 八 殿

辻 敬 助 殿

(26) 仕上連判書付覚

一 広戸川口ハ北ハ里長原并津田浦入相網代ニ得共、
右川口ハ南江里浦ハ罷越漁仕分罷成成来之旨長
原浦ハ申出、里浦ハ全右様之運ニ而ハ無御座い。
里長原津田浦之儀ハ網代入合ニ而先年ハ漁仕来居申

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

旨申上、并浦境之儀も長原浦ハ粟津川口両浦之境
と申上、里浦ハ長原浦北之洲崎大塚之辺迄ハ先年
里浦之地崎と申立、網代浦境申論出入ニ相成、右御
札各御蒙被成比日已来被召出御行着被仰付い得共、
双方様々申出、年古ク入組い次第も有之末御片着之
場ニも不相至、其内漁業相念迷惑仕旨御札崎江申上
いニ付其段御郡代様被仰上出入御落着被仰付い迄之
運御伺被下い処、長原浦之者共ハ大塚ハ南ニ而漁仕、
里浦之者ハ粟津川口ハ北ニ而漁仕、互ニ右之境を相
越申間敷い。将又大塚ハ川口迄之儀は双方論所故、
右場所之儀ハ両浦役人立合網代鬮取を以漁可仕旨被
仰付奉畏、則私共立合鬮取仕尚又左之通相究申い。

一 長原浦之儀は大塚切北江罷越漁仕申間敷い。

一 里浦之儀ハ粟津川口ハ南江罷越漁仕間敷い。

一 大塚ハ粟津川口迄之間ハ両浦役人立合、長日半日を
相極鬮仕い処、長之日ハ里浦ニ当り、半之日ハ長原
浦ニ相当り則今日長原浦網仕ヒ日ニ相成明十八日ハ
里浦ハ網入仕筈ニ罷成、後々右運を以隔日替ニ漁仕

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

一〇二

筥ニ相極申い。

但右之通相極鬪引仕、半ノ日長原浦ニ相当り毎月廿九日ハ長原浦漁仕筥ニい。随而小ノ月は翌期日又半之日ニ而兩日長原浦漁日相続い得共、此義ハ鬪当り之事故申分無御座い。

一右網仕方之儀ハ鯛曳大網迄ニ御座い。小網之儀ハ先是迄之通兩浦互入相ニ而前文境を越い共申分無之筥ニ相極申い。

但都而網之長曳網之丈とも相定い儀無之ニ付、中之網ハ大網ニも相紛、小網共申成儀相調畢竟争之基ニ相成い故、中曳中網と申儀不相用、小網之分ハ里浦も長原地へ罷越、長原も里浦地江參漁仕筥相極い。随而網之肩繩網遣り網共長百六拾尋、曳網之儀ハ片手式百尋已下ヲ小網と相定兩浦入相ニ漁仕、右尋已上ハ大網之部ニ相定前文大塚并川口限双方自浦分は格別右境ヲ越申儀ハ仕間敷い。

一大塚之沖海面之儀ハ右大塚と大谷山天師岑見通しを境と相極申い。

右ハ沖合より陸之地山を見通申儀ニ御座い。陸ハ沖江見通之儀ハ大塚を辰之方ニ相当り申い。

一粟津川口ハ沖海面境之儀ハ、板東村大麻山之絶頂と里浦大久保之松林之北ノ端とを見通し境と相極申い。

但此儀も沖合を陸江之見通ニ而御座い。陸より沖江見通之義は右川口を卯辰之間ニ相当り申い。

一前段之通境目御窺被仰付いニ付、海面網代見通之儀も申談相極置中儀ニいへハ、風波潮行之運ヲ考、網入仕、長原之網ハ粟津川口を下ニ而曳揚可申い。万一右境ヲ越いへハ漁師不調法ニ而申訳相立不申、網代料として漁物代之内御口銀引残百目ニ付三拾目宛網代料として互ニ相渡可申い、併右様之儀有之節は長原浦魚口取立下役善藏兵五郎兩人之内老人并里浦魚口取立下役之義ハ右浦役人並粟津浦庄屋重左衛門加役被仰付有之右之内日々老人宛罷出申儀故、彼者共江申出行着囉可申筥。

右之通御究之條々一統難有奉長い。兩浦役人漁師惣代

連判書付指上申ニ付、取立下役福井重左衛門善藏兵五郎儀も御呼出ヒ成御究之趣被仰聞、猶日々網仕ヒ方之儀も心を附、若不筋相仿ハ、其段慥ニ相見置御郡代様申上ハ様仕、第一漁師共争論仕セ不申様可仕旨被仰付奉畏ハニ付連判仕指上申ハ。以上。

文化七年十一月十七日

長原浦庄屋	坂東直兵衛
同 浦五人組	藤 作
同 浦漁師惣代	太次兵衛
同	夫右衛門
同	林 治郎
同	長 作
同	栄 作
同 浦魚口取立下役人	善 藏
同	兵 五郎
同 里浦五人組	庄 治郎
同	林右衛門

同 浦漁師惣代	伝左衛門
同	宇左衛門
同	兵右衛門
同	又 七
同	大 作

同 浦魚口取立下役人	粟津浦庄屋	福井重左衛門
------------	-------	--------

馬居七郎左衛門殿

近藤吉兵衛殿

右之通兩浦申談ハ義御郡代様江相伺ハ処、被聞召届旨被仰付ハニ付致写双方へ相渡置処如件。

午十一月廿五日

近藤吉兵衛	⑧
馬居七良左衛門	⑨
里浦へ相渡置分	

(27) 乍恐御窺奉申上覚

一里長原漁場網代之義ニ付、去ル午年彼是出入申立御糺之上当浦地崎二十丁二十四間之間論所ニ被仰聞不

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

一〇四

相当義ニ奉存い得共、先漁事盛り之時節故當時出入
 相片付い迄兩浦申談シ御請仕書附指上御座い所、其
 節御片付も無御座迷惑奉仕いニ付、其後年々書附ヲ
 以御落着之程奉願い得共是迄御下意無御座いニ付、
 猶又当七月ノ緯と迷惑之旨再応奉願上い義ニ御座
 い。然処右午年已來追々川口北へ三百間余も相流大
 磯ノ川口迄之間纔ニ相成魚網一帖仕イハ御座い得
 共、磯端川尻ニ而片行之運ヒニハ漁事相調不申いニ
 付右論所隔日ニ漁事仕旨申談し置御座い得共、休日
 ニ相当い而も殘網代之義ハ互ニ得心之上漁業仕、漸
 く渡世相凌居申所、先月晦日長原浦ノ半日ニハ殘齧
 代有之い共漁仕義相調不申旨申來いニ付其段漁師一
 統相談しい所、網子之者共申出いハ、左い而ハ日用
 之渡世ニ相成不申い故近村々江稼等ニ罷越申度旨申
 出い而、此間漁業相止り迷惑奉仕い。長原浦之義ハ
 漁場広ク網代宜敷御座い而、漁事多少之義ハ各別日
 々漁業丈夫ニ仕居申い。当浦之義ハ前文ニ奉申上通
 り漁場無数ニ付緯と迷惑奉仕い間、恐多御願ニハ奉

存い得共何卒御慈悲之上即刻御落着之程奉願上呉い
 旨漁師共ハ私共手元迄申出い。且当浦之義ハ先年四
 方海ニ而漁業第一ニ渡世仕居申所、西面ハ塩浜仕來
 仕、北海之義ハ大磯ノ鍋嶋迄之間漁事之義ハ、先年
 土佐泊浦へ被仰付南内川筋近年御請仕漁業仕居申
 所、此義も御指留被為遊、只今ニ而ハ東海迄ニ而外
 ニ漁事場所無御座、尤右場所之義ハ先年ノ津田別宮
 里三ヶ浦入合ニ漁業仕來り居申所、六ヶ年已前ノ入
 合御指留被仰付、地崎之義も隔日ニ漁事可仕旨被仰
 聞い。随而右場所芝渡之分当浦先年川成地開備とし
 て諸木植付奉願土所、土地絵図御用之御趣被仰渡早
 速絵図面指上御座い。且又岡崎御屋敷御用之飛船先
 年土佐泊堂浦北泊右三ヶ浦ノ相勤居申所、元文中
 之比右御用当浦沓ヶ浦漁船ニ而相勤い様被仰付迷惑
 之旨奉願上い所、其節当浦漁事諸魚御分一銀之義、
 九年五ヶ年切銀四貫三百目所請ニ被為仰付御請仕居
 申所、右御用相勤申ニ付為御救右五ヶ年請銀高其儘
 拾ヶ年切ニ被為仰付、右餘銀ヲ以漁船沓艘新ニ相作

り御用船迄ニ相備置御用相勤居申所、近年御年口ニ
 ヒ為遊外浦並ニ五分一銀被召上余銀無御座迷惑奉仕
 以ニ付、右之段書附ヲ以奉願上以処、明神村与頭庄
 屋綱木庄右工門殿被仰聞以ハ、御取調子中之義ニ以
 得ハ差扣以様被仰聞以ニ付先差扣居申、是迄右船諸
 雑用与内銀漁師一統割当り差出来以得共、右様仕来
 以漁場相縮ミ以而ハ右与内銀も指出申方便無之彼是
 粹と迷惑之旨申出以間、何卒御慈悲之上前文出入之
 義御落着之程偏ニ奉願上以間宜敷御成被仰上可被下
 以。右之段乍恐横切ヲ以御窺奉申上以。以上。

亥九月四日

里浦庄屋	益右衛門
同浦五人組	林右衛門
同	作兵衛
同	文次郎
同	喜作
同	杉之丞
黒田丹次様	

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

野口善兵衛様
 笹倉吉佐助様
 久保添弁左衛門様

② 乍恐奉願上覚

一里浦別宮浦諸漁業場外海内川筋共往古も入合ニ仕来
 り申以所、此度別宮浦庄屋森万五同浦五人組欄右衛
 門方も書状を以申来り以ハ、如何ニ相心得以哉先規
 ら入合ニ漁事仕来り以場所別宮浦分洲崎も南へ罷越
 網引事不相調趣申来り以。并ニ漁師共往古も引来り
 申所先達而之書状ニ茂次里引仕以杯と申来り以義ハ
 不埒之申出之儀ニ而御座以得ハ、右兩人御役所様ニ
 而御糺被遊可被下以ハ、難有可奉存以。

一先達而別宮浦里浦蛤漁業之儀ニ附彼是出入成以ニ
 付、御郡所様林小八郎様御在勤之節御役所様江別宮
 浦庄屋五人組并ニ漁師共大勢被召出以時節、御役人
 様ニ而御糺之砌、別宮浦庄屋森快太同浦五人与紋右
 衛門入合之所相違無之旨書附指上申以。右往古之通

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

一〇六

諸漁事仕らせの様被為仰付可ヒ下ゆ。敢早近年不漁ニ漁師共困窮迷惑奉仕の上、唯今漁事之時節ニ至り、右様彼是申ゆ而ハ漁業之相障リニも相成申ゆ儀ニ御座ゆ得は、乍恐御上之御運上銀とも難相離御座ゆ得は、何卒御慈悲之上を以、右之段乍恐奉願上通御役所様ニ而御行着被為遊可被下ゆハ、漁師共一統私共迄難有可奉存ゆ。以上。

(29) 乍恐御窮奉申上覚

一津田別宮里三ヶ浦沖合漁場之義、往古成来りヲ以漁業仕来ゆ所、近年長原一浦ニ被仰付ゆ所、文化七午年右浦を迷惑之旨奉願、大松村与頭庄屋近藤吉兵衛殿、黒崎村与頭庄屋馬居七郎左衛門殿御鍛被仰付ゆ砌、右浦を申出ゆハ、正徳三巳年魚口請所御究之節、別宮浦事場所請所証文之写ヲ以、里浦海へハ長原を入相、長原海へハ里浦之者漁事不相調旨申出ゆニ付、当浦ニも明和五申年内川筋蛤漕之義ニ付、彼浦を出入申立、其節御役所様ニおいて彼是御糺明之

上、別宮浦庄屋森快太、長原五人与紋右工門御糺書之表ニ、外海之義ハ往古を入相ニ漁仕来ゆ旨御鍛書ニ指上御座ゆ写差出ゆ。尤蛤漕之義は往古を仕来以入相ニ漁仕来居申ゆ。且右請所証文之内、津田浦入相と申文義御座ゆ所、寛政十一未年彼浦を津田浦へ対し出入申立、右御糺沖ノ洲浦与頭庄屋大田利喜右衛門殿被仰付彼是御糺之上先年を成来之旨双方得心之上、両浦漁師共并役人書附仕相済居申ゆ。然処右吉兵衛殿被仰聞ゆハ、其浦漁師共大網ヲ以長原浦へ罷越鯛曳仕網代相犯迷惑之旨申出ゆ間如何ニ哉之旨被仰聞承知奉畏、当浦之義ハ先年を八月上旬を中網出来九月下旬を大網仕来ゆ。当浦成来之旨申上ゆ処、猶被仰聞ゆハ、小網中網之義ハ格別、大網鯛曳之義ハ霜月朔日を相初申成来之旨長原を申出ゆ間、先当時大網之義ハ互ニ持海ニて漁可仕旨之被仰聞御尤ニ奉存ゆ旨申上内済成居ゆ所、猶彼浦を元禄年中ニ出来成ゆ広戸内川絵図之面ヲ以浦境証と申立ゆニ付相見及ゆ所、中喜来里両浦先年田地多川成ニ相応

二付、其後金くり開帰出入之事出来成ひ絵図二而、浦境之証ニ難相立旨申上ひ所、猶又被仰聞ひハ、里浦を浦境と申立ひ場所只今之川口迄二十町二十四間之間論所と被仰聞出入御落着迄之間右場所隔日ニ漁可任旨被仰聞ひニ付、当浦を迷惑之旨ヲ以、川成引帳杯ヲ以明ニ御訴訟申上ひ得共、兎角差懸當時之義故先御請仕方と被仰聞ひニ付無拠御請奉仕、其後当浦漁師被浦へ罷越中網遣居ひ所、右浦を大勢罷出大網と申立口論相及申ニ付、五人与林右衛門罷出、右浦漁師并五人与政助面談之上双方罷帰右之趣書附ヲ以申上ひ処、右浦先庄屋直兵衛如何相工ひ義哉、彼是御糺之上右吉兵衛殿被仰聞ひハ、中網之義ハ大網と相紛申ニ付、小網迄仕来之通可任旨被仰聞当浦漁師共迷惑可仕ひニ付、先達而被仰聞ひハ、鯛曳大網迄之由ニ御座ひ処吉兵衛殿如何相心得被成ひ義哉難斗、中網も御差留被成其上当浦土地崎并漁師共軒下二十町二十四間之間漁事之義ハ隔日と被仰聞ひ。御道理如何ニ奉存ひニ付其後紙面を以奉願ひ得共、御

江戸時代漁業に關する若干の史料(津川)

成下無御座迷惑奉仕ひ所、去ル亥年出水之節川口付替申ニ付、当浦を先達而申出ひ浦境只今出来仕ひ旨奉願ひ所、右御鍛として住吉村与頭庄屋山田五郎左衛門殿、広島村与頭庄屋寒川惣三次殿当浦へ御越被下、双方御糺明之上御扱被下ひ得共、長原浦之者共承知不仕ひニ付、御鍛書一卷差出御座ひ得共何之御成下無御座迷惑奉仕ひニ付、其後猶又御願申上ひ得共、未御成下無御座糺と迷惑之旨漁師共申出ひ。随而粟津川口之義五ヶ年已来大網相居ひ義ニ御座ひ取早当年ニ至ひ而漁業時節ニ相向ひ得ハ、互ニ御落着之程奉願上ひ。御繁多ニハ奉存ひ得共右之仕合不得止事奉願ひ義ニ御座ひ間、宜敷御取成被仰上可被下ひハ難有仕合ニ奉存ひ。仍而右之段横切ヲ以御窺申上ひ。以上。

卯七月

里浦庄屋 益 右衛門
同浦五人 林 右衛門
作 兵 衛

江戸時代漁業に関する若干の史料(津川)

辰ノ三月十二日

一〇八

小野木亀助様

久治郎
喜作
松之丞

里浦庄屋 益右衛門
同浦五人組 林右衛門
夫 平
庄治郎
喜八郎
作兵衛

(30) 乍恐奉願上覚

当浦伝左衛門又七相合網ニ而一昨十日早朝漁業ニ罷出粟津御番所前浜辺ニ而網遣居申い処、長原浦漁師共後刻罷越網手木元江碇投込漁事相妨申ニ付沖合ニ而口論成可申処、伝左エ門又七船ニ乗組い老人共達而指押い故、網操上漁事得不仕其儘罷帰りの旨私共迄申出い。

御郡代様御手代

辻永次 兵衛殿

先年々漁事入相ニ而網遣方相定り居申義ヲ右様害仕い而ハ当浦之者共漁場相調不申至極迷惑奉仕い。且近年御口銀成乍恐御益ニも相懸り此節漁事取中之時節ニ御座い故、已後網場妨相工い而ハ両浦共漁事相調不申様罷成奉恐入い。御繁多之御上御苦勞奉懸段重々奉恐入い得共、長原浦之者共被召出急々御行着被為仰付被下いハ、難有仕合ニ可奉存い。以上。

(31)

(裏端書) 文政五年四月八日
浜海出入書付上ひかへ

申上い覚

里長原浜海出入先達而已来、段々御理解ヲ以浦境之義ハ舊記ヲ以御建被為仰付い御趣被仰渡、漁業之義今以御片着成不申いニ付而ハ、此後互ニ自浦切漁業仕方争論等も無之哉ニ付、且長原方も自浦切願上い義等有之い得ハ、今一応両浦役人立会熟談仕業方ニ付争論等無

之の程代理分の方御居被為仰付の御趣是又被仰渡承知奉畏、右浦役人へ和談之道懸合仕の内、猶又御自分方も互ニ自浦切相稼の様可罷旨重々被仰聞の、先年々三ヶ浦成来ヲ以互ニ漁業入合仕来の場所今更自浦切相縮ひ而ハ漁師共人氣ニも相懸り、却而爭論之基ニも相成の様奉存の。尤里別宮津田三ヶ浦浜海三里余も御座の処、里長原両浦漁船不残漁業ニ罷出の義ハ少ク右様之節両浦境当りへ諸魚寄りの時、自浦切ニ相限の間浦々漁師共其場ニ居合不申の得ハ、右魚寄場所網入之間ニ合不申入相海ニ相成の得ハ相互取寄之漁師共網入仕、譬ハ長原海たりとも長原漁師津田海辺へ漁ニ罷越の節、右浦半々上浦辺へ魚寄りの而も自浦ニ居合不申の得ハ其節ハ相互入相漁之義ニの得ハ、当浦漁師共網入仕義御座の。自浦切ニ相成の而ハ魚寄りの而も漁師其場ニ居合不申の得ハ寄魚其儘流捨り申義ニ御座の。然ニおいてハ入相漁ニ相成の得ハ漁事之情念も無御座弥漁銀高等も相増申儀ニ御座の。且亦先達而も度々申上の通、初網後網之差別等之浦究も有之の得ハ、勿論

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

爭論ニ相成の義ハ無御座、將亦近藤吉兵衛殿馬居七良左エ門殿御鍛之節も、従来浜海入相之ゆへ小網ハ互ニ入相漁仕の様其節御鍛書ニも相居、今以互ニ入相ニ漁仕居申儀ニ御座の。尤三ヶ浦相之儀ゆへ津田浦も時行ニ入随ひ当浦海へ諸漁ニ罷越申儀ニ御座の。従来入相之浦方今更自浦切ニ相成の而ハ津田浦へも関合彼是以、猶又爭論増長仕弥以双方共大ニ迷惑奉仕義ニ奉存の。既ニ津田浦役人々先々出入之節も三ヶ浦入相之旨申上の運も御座の得ハ、彼是御引合之上何分共成来之通入相漁仕の様被為仰付の得ハ、被浦へ懸合仕如何分ニも猶又浦究熟談仕度奉存の。猶又此度之御場合ニ付而ハ両浦役人熟談一和仕右長原之趣熟レ程能方へ御居被為仰付の御趣被仰渡、一昨夜已来度々私共方々入割ヲ以懸合仕の得共、熟談不相成旨而已ニ而長原役人兎角此度懸合ニ乗合不申儀ニ御座の。右之段宜敷御堅察被仰付可下の。以上。

午四月八日

江戸時代漁業に関する若干の史料（津川）

里浦庄屋	益左エ門
同浦五人組	林右エ門
同	杉之丞
斎藤七之丞殿	
賀川庄左エ門殿	